

児童・生徒のコミュニケーションの在り方に関する研究(中間報告)

— 情報ツールが及ぼす影響の分析を通して —

田中恵美¹ 峰治²

本研究は、現代の児童・生徒のコミュニケーションの在り方を調査し、これからの社会を生きるために必要なコミュニケーション能力を見いだすとともに、その育成方法を探るものである。平成26年度は、児童・生徒のコミュニケーションに関するアンケート調査から実態を把握し、情報ツール活用に関する調査から、コミュニケーションに及ぼす影響を整理した。そこから、児童・生徒に必要なコミュニケーション能力とは何かを探った。

はじめに

平成23年文部科学省「コミュニケーション教育推進会議審議経過報告」(以下「報告」という。)では、社会構造の変化に伴う価値観、生活パターンの多様化により、地域でのコミュニティ形成が難しい状態が続いており、それが、子どもたちのコミュニケーションの在り方に影響を及ぼしていると述べている。

また、子どもたちは、気の合う限られた集団の中でのみコミュニケーションをとる傾向があることや、コミュニケーションをとっているつもりが実際は自分の思いや考えを一方向的に伝えているに過ぎない場合が多いことなどを、コミュニケーションの課題として挙げている。

さらに、経済協力開発機構(OECD)が「主要能力(キーコンピテンシー)」の一つとして、「多様な社会グループにおける人間関係形成能力」を挙げていることや、企業が学生を採用するに当たって重視する能力として、11年連続「コミュニケーション能力」が挙げられていることなどから、子どもたちの人間関係形成能力やコミュニケーション能力の育成を求める社会的要請が高くなっているとも述べている。

そこで本研究では、児童・生徒のコミュニケーションの在り方を調査し、これからの社会を生きる子どもたちに必要なコミュニケーション能力を見だし、その能力の育成方法を追究していく。

本稿では、平成26・27年度の2年計画で行う研究の1年目の取組について報告する。

研究の目的

社会の変化や情報ツールの普及により、児童・生徒のコミュニケーションの在り方が変化している。それに伴い、社会で必要とされるコミュニケーション能力

も変化していると考える。そこで本研究では、児童・生徒のコミュニケーションの取り方や情報ツールに対する意識等を分析し、その在り方を明らかにする。そして、これからの社会を生きるために必要なコミュニケーション能力を整理し、学校の教育活動の中でのコミュニケーション能力育成のための、具体的な方策を提案することを目的とする。

研究の内容

1 コミュニケーションについて

コミュニケーションとは、一般的に情報の伝達行為を指すが、その捉え方は様々である。例えば「コミュニケーションがとれない」という言葉を聞いたとき、「相手にうまく伝達できなかったようだ」と感じる場合と、「相手とうまく人間関係が作れていないようだ」と感じる場合とがある。これについて、高橋(2010)は、「コミュニケーションが単なる情報の伝達・共有という物理的な行為にとどまらず、心への働きかけという精神的な作用をともなう行為であることを示すもの」と述べている。つまり、「コミュニケーション」とは、情報を伝達するだけでなく、その行為によって起こりうる結果までも含む場合があるということである。

このように、「コミュニケーション」という言葉は、コミュニケーションをとった結果、得られる状況をも表していることが、捉え方を多様にしていると考えられる。

実際に、コミュニケーションをとるときは、何かの「作用」を目的としていることが多い。例えば「相手と仲良くなりたい」から「話しかける」、「相手に自分の考えを理解してほしい」から「発表する」、「相手と効率よく作業をしたい」から「話し合う」などである。コミュニケーションは「仲良くなりたい」「考えを理解してほしい」「効率よく作業したい」などの「作用」のための行為である。言い換えると「作用」=「目的」のための「行為」=「手段」といえる。

そこで本研究では、コミュニケーションを「伝え合う」という手段としてのみ捉えるのではなく、何のた

1 教育課題研究課 指導担当主事

2 教育課題研究課 指導主事

めに伝え合うかという目的までをも含んだものとして捉えることとする。

2 児童・生徒のコミュニケーションの実態

(1) コミュニケーションの在り方に関する調査

児童・生徒が、コミュニケーションをとる際に感じていることやコミュニケーションをとりやすいと感じる環境の傾向を探るため、平成26年9月にアンケート調査を実施した。概要は次のとおりである。

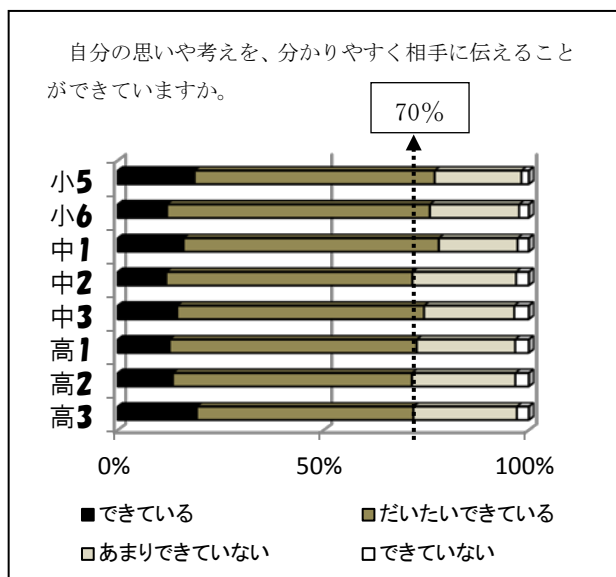
第1表 アンケート調査概要

1 調査方法	質問紙によるアンケート調査
2 調査対象及び標本数	
(1) 調査対象	
【小・中学校】	県内の各市より1校、各教育事務所管内の町村より1校 計40校(小学校20校、中学校20校)で実施。 対象は、小学校は、5・6年各1クラス、中学校は、各学年1クラスで実施。
【高等学校】	県立学校20校、対象は、全学年。各学年1クラスで実施。
(2) 標本数	
児童・生徒	5,391人
小学生	1,297人(5年;635人 6年;662人)
中学生	1,966人(1年;662人 2年;651人 3年;653人)
高校生	2,128人(1年;725人 2年;706人 3年;697人)

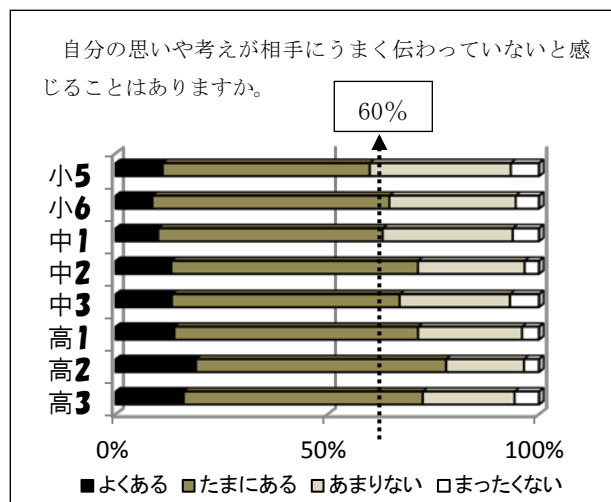
この調査では、「伝え合いの実態」「情報ツールの利用」「コミュニケーションに関する意識」等について、児童・生徒の実態を探った。

伝え合いの実態として、「自分の思いや考えを、分かりやすく相手に伝えることができますか」という質問に対して、「できている」「だいたいできている」と回答した割合は、どの学年もほぼ70%に達している(第1図)。

一方で、「自分の思いや考えが相手にうまく伝わっていないと感じることはありますか」という質問に対して、ほとんどの学年で、60%を超える児童・生徒が「よくある」「たまにある」と回答している(第2図)。これは、多くの児童・生徒が、「分かりやすく伝えている」としながらも、「伝わっていない」と感じていることを表している。



第1図 アンケート調査結果①

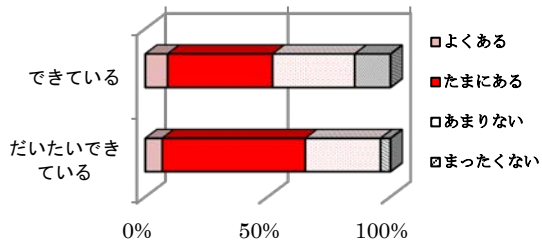


第2図 アンケート調査結果②

「分かりやすく伝えることができている」と回答した児童・生徒のうち「伝わっていないと感じる」割合をみると、「できている」では50%弱、「だいたいできている」では約60%の児童・生徒が「伝わっていない」と感じていることが分かった(第3図)。分かりやすく相手に伝えているというのは、自分の感覚のみの判断であり、「相手にうまく伝わっていない」と感じるのは、相手が「伝わっていない」ことを何らかの形で表した時である。「分かりやすく伝えることができている」と回答する児童・生徒は、「相手に伝わったから、分かりやすく伝えている」と判断しているのではなく、「自分は分かりやすく伝えているから」という一方向からの判断で選択している可能性がある。

「伝えている」けれども「伝わっていない」という矛盾した回答は、児童・生徒が、相手が今どのような状況であるかを意識して伝えていないことが要因の一つと考えられる。

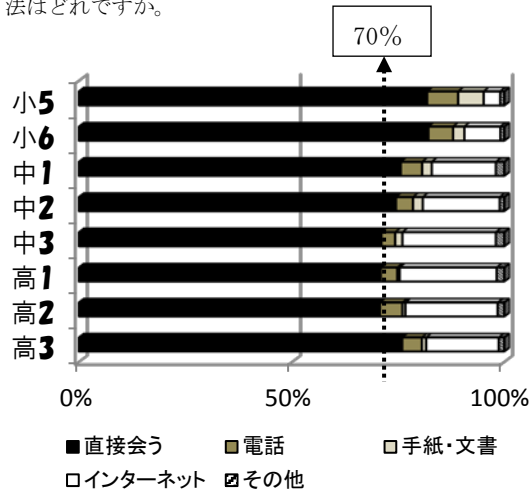
「分かりやすく相手に伝えることができている（第1図）」と「自分の思いが伝わらないと感じることがある（第2図）」とのクロス集計



第3図 アンケート調査結果③

また、「あなたが自分の思いや考えを伝えるときによく使う方法はどれですか」という質問に対して、「直接会う」と回答した児童・生徒の割合が、どの学年もほぼ70%に達している（第4図）。ほとんどの児童・生徒が、インターネットに接続できる機器を使用している（後述）にもかかわらず、「直接会う」方法を選ぶ割合が予想に反して高い結果となっている。

あなたが自分の思いや考えを伝えるときによく使う方法はどれですか。



第4図 アンケート調査結果④

「直接会う」を選んだ児童・生徒が、なぜその方法を選んでいるかの理由をみると、割合が高い順に「言葉だけでなく、自分の表情や態度などからも気持ちを伝えられるから(40%)」「気楽なおしゃべりのように、緊張しないで気持ちを伝えられるから(25%)」「相手に気持ちが伝わっているかを、その場で確かめることができるから(9%)」となっている。約65%の児童・生徒が、「表情や態度でも伝えられる」や「緊張しないで伝えられる」などを理由に挙げていることから、「相手がどう受け取っているか」よりも「伝えやすさ」に意識が向いていると考えられる。

コミュニケーション能力の向上により、生活がどのように変わるかという質問（自由記述）では、どの校

種においても、今ある人間関係をより良いものにするのと、新たな人間関係を作り出すことに期待する記述が多く見られた（第2表）。

第2表 自由記述内容（抜粋）

コミュニケーション能力の向上により、生活がどのように変わるか。

【小学生】

- ・初めて会う人とすぐ友だちになり、信頼し合えるようになりそう（5年女子）
- ・落ち込んでいる人や困っている人をうまくはげませる（6年女子）
- ・ケンカが減ってさらに仲が深まる（6年男子）

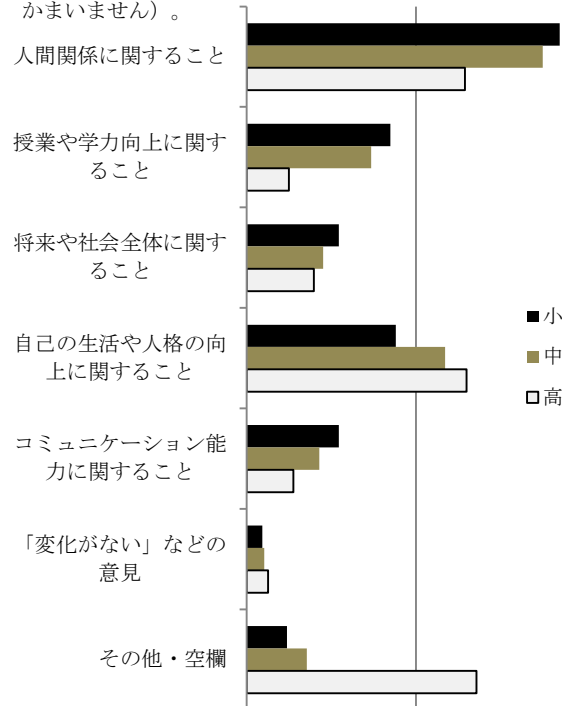
【中学生】

- ・家族との会話がはずむ（1年女子）
- ・友だちが増える（2年男子）
- ・頼れる仲間が増え、困ったときも安心できる（3年男子）

【高校生】

- ・たくさんの人との関わりができて、人生の視野が広がる（1年男子）
- ・相談してくれる人が増える（2年女子）
- ・悩みがあっても相談し合うことができるので、前向きになれる（3年男子）

今よりコミュニケーションをとること（伝え合うこと）が上手になったら、あなたの生活や人生は、どのように変わるとお思いますか。友だちのことや勉強のこと、将来のことなど、あなたの考えを具体的に書いてください（箇条書きでもかまいません）。



第5図 アンケート調査結果⑤

これらを記述内容ごとに、いくつかのカテゴリーに分け、児童・生徒の意識をまとめた（第5図）。「人間関係に関すること」の記述の他に、「人気者になる」「クラスが楽しくなる」など「自己の生活や人格の向上に関すること」も多く挙げられていた。これらも、良好な人間関係の構築につながるものであることを思えば、人間関係に対する期待の高さが分かる。

アンケートの結果より、児童・生徒は日頃の伝え合いの中で、「伝える」ことに意識はあるが、「伝わったかどうか」には、「伝える」ことほど意識が向いていないと考えられる。「伝える」ことは自然に行っているが、その後「伝わったかどうか」までを確認したり、相手の様子から推し量ったりすることを日常的に行っていない可能性がある。このことは、「直接会う」理由として、「表情から伝わる」や「緊張しない」などの伝えやすさを一番に挙げ、「相手に伝わっているか確認ができる」という、相手を意識した回答の割合が低いという結果からも、「伝える」ことに意識が向いていることが分かる。

そして、コミュニケーション能力を活用して、より良い人間関係を形成したいと考える児童・生徒が多いことも、この調査から明らかになった。

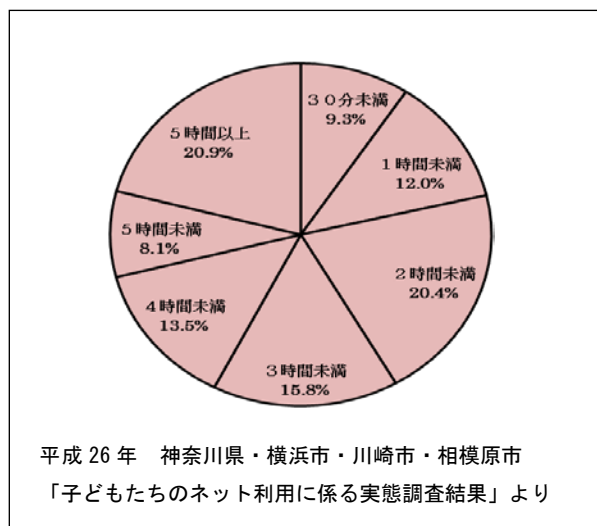
(2) 情報ツール活用に関する調査より

近年の情報機器の急激な普及に伴い、情報ツールを使用する児童・生徒の割合も増加している。そこで、情報ツールが、児童・生徒のコミュニケーションにどのような影響を与えているのかを整理する。なお、現在インターネットに接続できる情報機器が多様であることと、インターネットに接続できる機器の多くがコミュニケーションツールとしての機能を有することから、本研究における「情報ツール」とは、インターネットに接続できる機器とする。

平成26年神奈川県・横浜市・川崎市・相模原市「子どもたちのネット利用に係る実態調査結果」によると、全くインターネットを利用していないと答えた児童・生徒は、小・中・高校生13,251人のうち、約450人(3.4%)のみであることから、ほとんどの児童・生徒が情報ツールを使用していることが分かる。

さらに、情報ツールを利用する児童・生徒の中で、スマートフォンを所持している割合は、全体で50%を超え、高校生は、90%以上の生徒が所持している。

1日の情報ツールの使用時間を見ると、「1時間から2時間」との回答が、全体の約20%である一方で、「5時間以上」とする回答も約20%と高い割合であった（第6図）。情報ツールの利用内容については、使用時間の長短に関わらず、家族・友人との連絡やおしゃべりに使用している時間が、全体の50%近くを占めることから、多くの児童・生徒が日常的なコミュニケーションツールとして情報ツールを活用していることが分かる（第3表）。



第6図 1日の利用時間

第3表 1日の利用内容（上位5位）

	30分未満	5時間以上
友達・家族の連絡	42.6%	21.3%
友達・家族のおしゃべり	13.8%	27.8%
趣味の調べもの	15.9%	7.5%
音楽・作曲・読書・動画	14.7%	20.4%
ゲームや占い	13.0%	23.0%

平成26年 神奈川県・横浜市・川崎市・相模原市
「子どもたちのネット利用に係る実態調査結果」より

では、どのようにコミュニケーションに活用しているのだろうか。平成26年総務省情報通信政策研究所「高校生のスマートフォン・アプリ利用とネット依存傾向に関する調査報告書（以下「ネット依存傾向に関する調査報告書」という。）」によると、使用する情報ツールに違いはあるが、共通しているのは、ソーシャルメディア（LINE・Facebook・Twitterなどの各サービス）である。高校生の90%以上が、何らかのソーシャルメディアを利用していることが分かる。また、ソーシャルメディア上の人間関係について、家族に加え、友人をいくつかの類型に分け、それぞれの人数を調査した結果を見ると、「ソーシャルメディア上だけの友だち」が平均で19.4人、次いで「今通っている学校の友だち」が15.0人となっている。ネット依存傾向が低いとされる生徒にも「ソーシャルメディア上だけの友だち」が平均8人いることから、高校生にとって、「ソーシャルメディア上だけの友だち」が存在することは、特別なことではないことが分かる。

また、ソーシャルメディアを利用するようになってからの人間関係の変化についてみると、「友だちとより気軽にコミュニケーションができるようになった」（45.5%）、「元々いた友だちとのつきあいがより深くなった」（38.5%）、「学校の中でそれまで親しくしていなかった人たちとつきあいができた」（32.1%）

など、情報ツールの活用が、人間関係に良い変化をもたらしていると答える生徒が多い。また、全体に占める割合は低いが、「親とのコミュニケーションが増えた」(10.1%)とあり、これは「親とのコミュニケーションが減った」(5.0%)よりも高くなっている。

これらを踏まえると、児童・生徒が情報ツールを使用することにより、コミュニケーションをとる時間が増え、人間関係に広がりが出てきていると言える。情報ツールを使用しなければ、距離や時間や金銭面で、到底知り合えない人間同士が、好きな時間に、好きな相手と、好きな場所で人間関係を作れることが、このような結果につながっていると考えられる。

しかし、人間関係づくりやコミュニケーション能力の育成という視点から見ると、課題と考えられる結果もある。

「ネット依存傾向に関する調査報告書」によると、ネット依存傾向が高いとされる生徒は、「ソーシャルメディア上だけの友だち」の平均が90人を超える。しかし、その生徒が、「友人が少ない」と感じている割合は、他の生徒より高くなっている。

また、ベネッセ教育総合研究所「中・高校生のICTメディアの利用実態と意識」(2014)によると、「メールなどのやりとりが嫌になることがある」と答えた中学生は30%弱、高校生は50%を超えている。

これらのことから、情報ツールを介した人との関わりは、時間や場所を自由に選べることで、やりとりが容易になっているが、良好な人間関係につながらない場合や自分の意志でやりとりをしていない場合もあることが読み取れる。

さらに、「携帯電話やスマートフォンはコミュニケーションの力を伸ばすと思わない」と考える生徒の割合が、中学生は2008年の46.0%から2013年の54.4%に、高校生は2008年の48.7%から2013年の62.2%に変化しており、情報ツールが、コミュニケーション能力育成に関しては有効ではないと考える生徒が増えていることが示されている(第7図)。

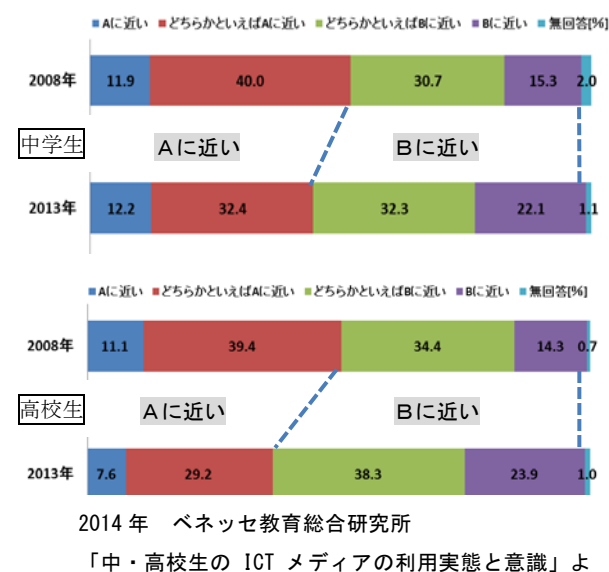
この結果から、ここ数年で急激に普及したスマートフォンに対して、「コミュニケーションの力を伸ばすと思わない」と考える生徒が増えていると推察できる。

これらの結果から、コミュニケーションをとる相手や場を自分の好みで選びやすくなっていることや、やりとりする時間を自由に選べることなどの要因が、児童・生徒にプラスの影響とマイナスの影響両方を及ぼしていると考えられる。

また、人間関係づくりにおいては、自分でやりとりする相手や場を選べることで、関わりを持つ相手が限定されたり、人と関わる場が偏ったりするという影響も考えられる。

A:携帯電話やスマートフォンはコミュニケーションの力を伸ばすと思う

B:携帯電話やスマートフォンはコミュニケーションの力を伸ばすと思わない



第7図 携帯電話・スマートフォンとコミュニケーション力

(3) 児童・生徒の実態から見える課題

コミュニケーションに関するアンケート調査と情報ツールに関するアンケート調査から、児童・生徒のコミュニケーションの実態と課題が見えてきた。

児童・生徒は、コミュニケーションをとる際、相手がどのような状況でその言葉を受け取っているかを意識することは少なく、発信に重きを置いたやりとりをしている。その結果、自分の伝えた内容を相手がどのように受け取っているか、どのように感じているかといった相手の反応に対する意識が低くなっていると考えられる。

また、情報ツールを使用したコミュニケーションの場は、学校の教室のような様々な関係性の人間が存在する場と違い、比較的、構成メンバーとの関係性や話題などで参加する場を選びやすい。そこから、児童・生徒は、どのような人で構成されているか、興味関心があることは何かなど、自分の好みでコミュニケーションをとる場を選ぶ機会が増えていると考えられる。

これらの実態から、児童・生徒のコミュニケーションの特徴の一つとして「自分を基準としたコミュニケーション」をとる傾向があることが挙げられる。具体的には、自分の伝え方に意識が強く向くことと、自分の好みに合わせて、コミュニケーションをとる相手や場を選ぶ機会が増えていることを指している。

この特徴は、児童・生徒が、自分の思いや考えを強く周りに発信したり、自分の得意分野を発揮でき、自己表現できる場を多く見付けられたりするという点で、プラスに働くと考える。

反面、前述の「報告」でも、「子どもたちは気の合う限られた集団の中でのみコミュニケーションを取る傾向が見られ、また、コミュニケーションをとっているつもりが、実際は自分の思いを一方向的に伝えているにすぎない場合が多いなどの指摘がある」との課題を挙げているように、児童・生徒のコミュニケーションのとり方が一方向的になったり、コミュニケーションをとる相手や場が、限られたり、狭まったりするというマイナスの影響を及ぼす可能性がある。

こうしたコミュニケーションのとり方が、児童・生徒の持つ課題ではないだろうか。自分を基準としたコミュニケーションばかりに偏ることは、これからの社会を生きていく上で、マイナスの影響を及ぼすのではないかと考えた。

3 育成すべきコミュニケーション能力

これからの社会を生きるために必要なコミュニケーションに関する力を、文部科学省・厚生労働省・日本経済団体連合会などが提示しているものを参考に、次の2点にまとめた。「他者の考えや立場を理解し、自分の状況を受け止める力」と「多様な価値観を持つ人と協働し課題を解決する力」である。様々なコミュニケーション能力が必要とされるなか、この2点を取り上げたのは、児童・生徒のコミュニケーションの課題から、日常生活の中で育成が困難な力であると考えたからである。

これら二つの力と、先に挙げた児童・生徒のコミュニケーションの課題の関連を以下のように考察する。

一方向的に自分の思いや考えを伝えていると、やりとりしている相手の状態を知ろうとする意識が低くなる。相手の状態を理解せずに伝えているということは、自分自身がどのような状況にいるのかも理解できないことにつながり、よりよい人間関係を築くことが困難になる可能性がある。

また、コミュニケーションをとる相手や場を、自分の好みで選んでいると、初対面の人や考え方の異なる人との、人間関係づくりや協働作業に、不安や不得意さを感じてしまう可能性がある。

そこで、児童・生徒には、「相手を意識してコミュニケーションをとる能力」と「誰とどのような場面でもコミュニケーションをとれる能力」の育成が必要であるとの考えに至った。具体的には、自分の発信により、相手の気持ちや言動にどのような影響があるかを推し量りながら、コミュニケーションをとる力と、相手や場に左右されずに、その場に必要でコミュニケーションをとることができる力である。

研究のまとめ

本研究において、平成26年度は、児童・生徒のコ

ミュニケーションの在り方の実態を調査し、情報ツールが及ぼす影響を探った。そして、児童・生徒は、「自分を基準としたコミュニケーション」をとる傾向があるという課題を整理し、育成すべきコミュニケーション能力を、「相手を意識してコミュニケーションをとる能力」と「誰とどのような場面でもコミュニケーションをとれる能力」であるとした。

今後は、これらの力の育成に向けて、具体的な方策を検討していく。

おわりに

研究2年目に向けて、学校の教育活動の中でのコミュニケーション能力育成方法を模索している。その中で、この取組は、学校生活の様々な目的とつながると感じた。道徳や学級活動の目的、児童・生徒指導のねらいの中には、望ましい人間関係の形成に関する内容が含まれている。つまり、児童・生徒のコミュニケーション能力の育成は、よりよい人格形成や、集団づくり、学校づくりに欠かせないということである。

今後は、コミュニケーション能力の育成を、意図的・計画的に学校全体で取り組むこととして、組織的な育成につなげたい。

引用文献

- 文部科学省 コミュニケーション教育推進会議 『子どもたちのコミュニケーション能力を育むために～「話し合う・創る・表現する」ワークショップへの取組～』（平成23年8月29日）
- 神奈川県・横浜市・川崎市・相模原市「子どもたちのネット利用に係る実態調査結果」報告書（平成26年10月10日）
- 総務省情報通信政策研究所「高校生スマートフォン・アプリ利用とネット依存傾向に関する調査報告書」（平成26年7月）
- ベネッセ教育総合研究所「中・高生のICT利用実態調査2014 報告書」（2014年）
- 高橋眞知子「組織を動かすコミュニケーション力」実教出版株式会社（2010年）

参考文献

- 厚生労働省 若年者就職基礎能力支援事業「企業が若者に求める就職基礎能力」（平成19年）
- 文部科学省「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について答申」（平成20年1月17日）
- 文部科学省「キャリア教育とは何か」（平成23年）
- 日本経済団体連合会「新卒採用（2014年4月入社対象）に関するアンケート調査結果」（2014年）
- 平田オリザ 2012『わかりあえないことから』講談社